

カラフルな世界

島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程 九年生の作品

運動会の準備の一環で、絵の具のサンプルを見ながら注文書を書いていたとき、

「あ、『肌色』って書いてある。」

「ホントだ。よくないね。」

そんなやりとりがきこえてきた。注文書をもう一度よく見てみると、確かに『肌色』の二文字が印刷されていた。「いいクラスだな。」と思いながら私は『肌色』に二重線を引き、「うすだいたい」と書き入れた、と同時に、昔の思い出が蘇ってきた。

私が日本の小学校に通い始めたのは、7歳、二年生からである。言葉が分からず、不安でいっぱいだったが、先生がカタコトの英語でがんばってくれたり、ボランティアの先生が学校に来て日本語を教えてくれたり、クラスの子たちが積極的に話しかけてくれたりしたおかげで一カ月もするとみんなとコミュニケーションがとれるようになって、授業にもついていけるようになった。

そんなこんなであつという間に小学校中学年になっていた私は、「もうだいぶ慣れてきたし、これからも上手くやっていけるだろう。」と、そう思っていた。しかし、現実はず違った。

とにかく皆で仲良く遊んでいた低学年とは違い、中学年になるとケンカや言い争いが増えるようになった。そんな中、私があるとあるクラスメイトと言い争いをし、その子が静かになって私が「よっしゃ。」と思っていたときだった。

「だまれ外国人！」

その子の放った、たったの一言で形勢は逆転し、私が何も言い返せないまま言い争いは終わった。

「ずるい。」と思った。自分が外国人なのは事実だから何も言い返せない。それと同時に、「外国人」という言葉に怒りを覚えた。なぜ国籍が違うだけで発言をする権利がなくなってしまうのか。悔しかった。

その日から、私は「外国人」という言葉に敏感になった。「外国人なのに日本語が上手だね。」と言われても、ちっとも嬉しくないし、初めて会った人に「日本語話せますか？」ときかれるだけでイラっとするようになってしまった。「外国人」と言われるたび、自分の権利がなくなっていく感じがした。

「昔の自分って単純だな。」と思った。今の私は、「外国人」と言われても全く気にならない。というのも、中学校で出会った新しい仲間は、『肌色』はいろんな色」ということを理解していて、私に「うすだいたいじゃなくても、あなたは『肌色』だよ。」と私に接してくれたからだ。

このことから、私が皆さんに伝えたいことはただ一つ。

『肌色』はうすだいたいだけじゃない。」

ということだ。これを理解することで、いろいろな色を傷つけることなく受け入れられるよ

うになるだろう。

そうやって、カラフルになった世界を想像して、今日も私は「うすだいたいじゃない『肌色』」として生きている。